



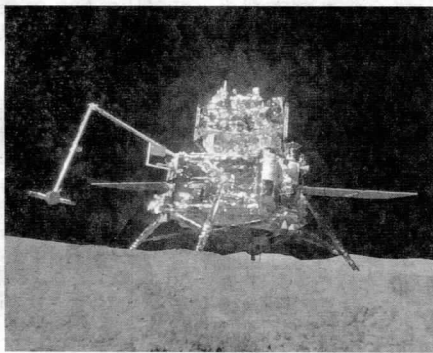
世界で初めて月の裏側の土壌試料を採取した中国の無人探査機「嫦娥6号」が、地球に帰還した。内モンゴル自治区にパラシュートで落下し、駆け付けた人員が中国国旗を立てた。(EPA時事)

# 宇宙資源開発で先行目指す

## 中国 ハイテク強化狙う

### 世界初 月裏側の土壌持ち帰り成功

【北京時事】月の裏側で土壌を採取した中国の無人探査機「嫦娥6号」が地球に帰還した。月の土壌は米国と旧ソ連も採取している



中国国家宇宙局(CNSA)が公開した月探査機「嫦娥6号」の月面着陸(CNSA/AFP時事)

が、裏側からは世界初。中国は得られた知見を国有企業などと共有し、科学技術の振興やハイテク産業の強化につなげる構えだ。宇宙資源開発で先行することを目指す。

「主な任務の一つは新鉱物の探査だ。中国ニュースサイトの澎湃新聞は6月、嫦娥6号に関する専門家のこうした見方を伝えた。中国は2020年に月の表側から持ち帰った土壌から未知の物質を発見。裏側には核融合の燃料となるヘリウム3や火星などへの探査を行う上で不可欠な大量の水があるとみられている。

宇宙開発に携わる日本政府の関係者は嫦娥6号の成果について「日本も当然注視している」と述べた。

### 中国の宇宙開発

2013年	無人探査機「嫦娥3号」が月面着陸
19年	無人探査機「嫦娥4号」が世界で初めて月の裏側に着陸
20年	無人探査機「嫦娥5号」が月の土壌を採取し帰還
21年	無人探査機「天問1号」が火星着陸
22年	中国独自の宇宙ステーション完成
24年5月3日	無人月探査機「嫦娥6号」打ち上げ
6月2日	嫦娥6号が月の裏側に着陸
6月25日	嫦娥6号、月の裏側の土壌試料採取し帰還
30年までに	有人月面着陸
35年までに	月面研究ステーション建設

(北京時事)

「中国の宇宙事業は国が主体となっていて進んでいるが、部品の設計や開発を通じて国内の幅広い事業者が関与してきた。電気自動車(EV)の分野などでの急速な技術進歩にも「航空宇宙分野での急成長が背景にあるのは間違いない」と日系メーカーとみられている。

た。その上で、中国は近年、多くの宇宙関連事業を成功させてきたと指摘、「技術力の高まりに驚

いている」と語った。中国メディアによると、これまでに約10万人の研究や技術者が月の探査事業に参画。ここでの研究内容を基に、人工知能(AI)やエネルギー関連分野で技術革新が起きたという。